

原告団

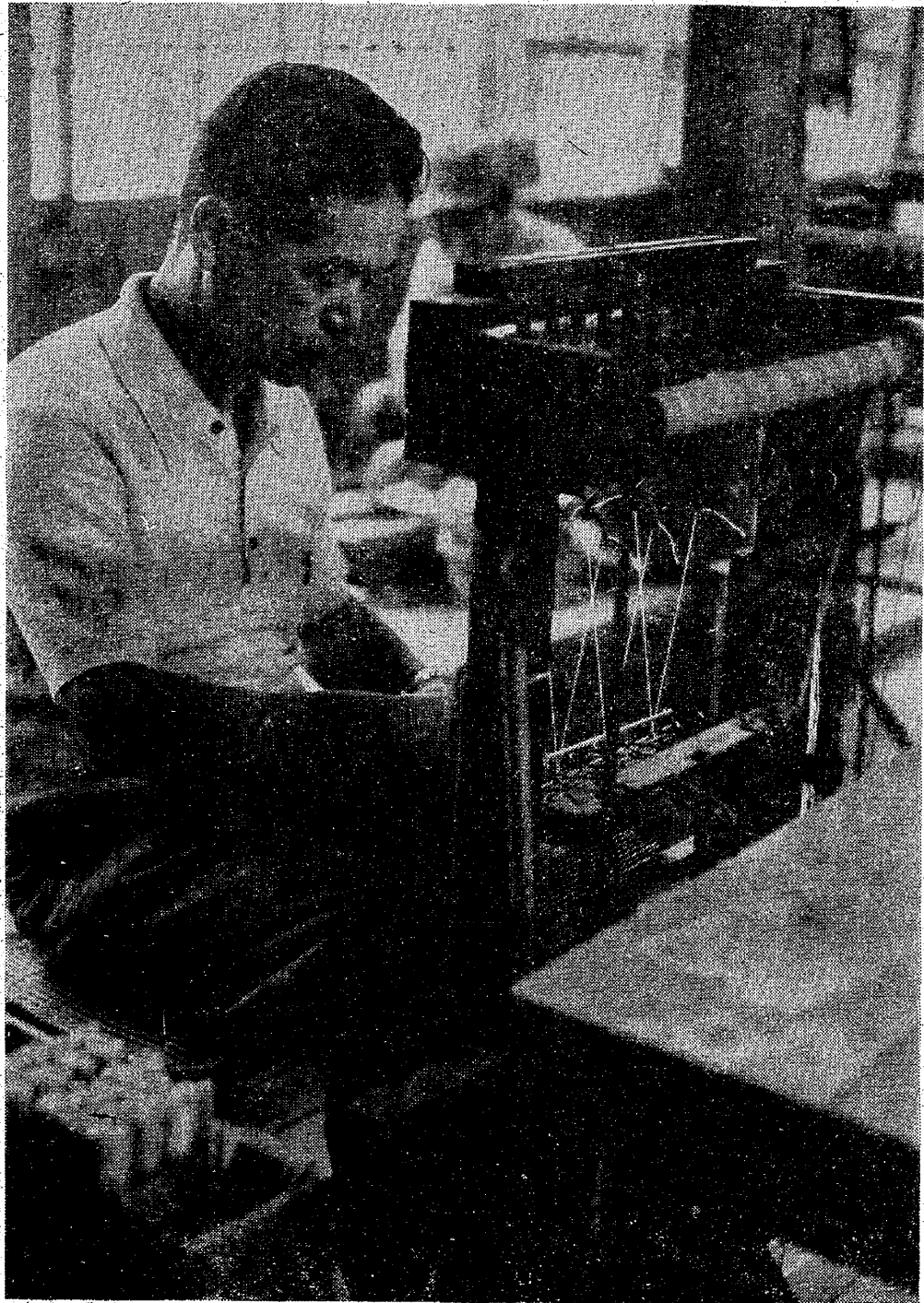
遺族・CO裁
判、災害責任
追及、特集号
第七十八号

原告団レポート

CO患者——
中村 賢 さん

万田作業所

中村賢さんは、俗に「三池のCO患者」と呼ばれる人間の一人である。現在、万田作業所で働いている。仕事といえば、浅草海苔を乾かすために使う海苔ミシンや、ざるそばを店で客の前に盛って差し出すときに使うそばミシンなどの製造。いずれも薄竹の材料を、足踏りで、一日分の賃金ももらえない。加害者の三井鉱山として、せめてそれぐらいの補償を与えるのには、当然の理である。身につかない者もいるのだから、



神妙に、そばミシン編み作業中の中村さん。表面常人と少しも変ったふうに見えないが、体のなかにどうにもならぬ中毒症ががくれていて、何かにつれそれが爆発して家族を困らせる。

危い頭痛薬

材料の長さ二十センチほどの薄竹は注文先から送ってくる。それを足踏みの編み機で編みあげた後、十七・五センチ真四角のそばミシンに切り揃えて仕あがり。能率は、一日に十五枚ほど。いつても中村さんの場合、半日作業だ。そんな作業でさえ、CO患者の猛烈な激痛で、中村さんの長女、中村さんにとっては決して楽なものではない。現に、七、八枚編む

中毒症が命の証しか

家族みんなをまきこんで放さぬ宿命

停年後どう生きてゆくか

妻も苦闘を

中村さんは、五十二歳。大正十三年一月十日生れ。住居は、大牟田市大字歴木五二一。三井鉱山の上原長宅の二階に在る。家族は、妻のナツエさん(中村さんより二つ上の五十四歳)との間に子どもが三人。

子供の嘆き

長女がけい子さんで、二十九歳。すでに他家に嫁いでいる。次女は美佐子さん、二十八歳。看護婦として、家から市内の病院に通勤。長男は賢正さん、二十四歳。東京の法政大学(政治学四年生)で勉強中。「卒業後は、まず労働組合の力の強いところで働く」とことが第一の希望だという。やっばり子ども心にも、父親の被災を通じながら、父親の政治的、経済的、社会的矛盾が痛いほどつきささっているのを見える。

つる不安

中村さんは、天領町病院から勝利分院へ転院したあと、その年、

かまの手で萬浦の坑口から助け出されたが、自分を助けてくれたなかまの一人は、その後坑底で命を落としているという。その頃子どもといえは、三人そろって一番大切な時期だった。長女のけい子さんが十六歳で高校一年生。次女は美佐子さんが十五歳で中学三年生。そして長男の賢正さんが十一歳で、小学四年生。ナツエさんは子どもたちといっしょに、爆発の煤で全身汚れたまま三井天領町病院に担ぎこまれた夫の中村さんにつきそったものの声をあげて泣きじゃくる長男の賢正さんの姿を見れば見るほど、これからはどうしようもなかった。中村賢正さんは、CO患者となつてしまった今もキリッとした顔立ちだけは崩れていない。

光る片りん

今は「ぼけっ」としている(ナツエさんの話)人柄が、被災前はきびしかった。なかでも子どもたちの教育には熱心で、「とにかく何によらず、学校で百点をもらって帰らないと手先に出ない」(ナツエさんの話)という。今は法政大学の学生で賢正さんも「父が恐ろしくて、たたかれる前に私はいもう泣いていました」と述懐する。きびしさも、通り一辺のものではなかった。

絶えぬ負傷

中村さんは、家から万田作業所まで毎日単車で往復。左足の自由がきかないため、やむを得ず被災前につけていた運動靴に頼っているが、四六時ちゅう相手なしの事故を起しては傷だらけ。同作業所で、同じそばミシン編みの仕事をしている一人の患者なかまの話。「とにかくあんた、相手なしの交通事故を起しては、しょうもない。怪我だらけです。被災前は運動神経がびりびりした人。今ははかばかしく、反射神経が完全にすりきれてしまっています。顔をみても、しっぺ返しとらさるんですが」と、語ったが、あの日を境に大逆転したCO患者中村賢さんの生涯もまた、例によってけわしいに変わりはな